

平成十九年三月十五日（木曜日）

午前十時開会

[○白眞勲君](#) 民主党・新緑風会の白眞勲でございます。

両公述人におかれましては、私がここでお聞きすることもなく、いつもあちこちでお会いさせていただいております、何を聞こうかなと逆に迷っていた部分もあるんですけども、私とお二人との会話というよりも、今日は皆様、自民、公明、民主、いろいろな皆様がいらっしゃいますので、皆様に聞いていただきたいという部分でまたお話の方もさせていただきたいというふうに思っております。

特に、伊豆見公述人におかれましては、何年前でしょうかね、お会いさせていただいたときに、まだミサイルも、九四年のミサイルはたしか発射、九八年でしたっけね、あのミサイルが一回発射された後でしたけれども、そのうちいずれ北朝鮮は核実験するぞと、そのときから、まあ予想というのは変な言い方なんですけれども、それをはっきりと言明されていたという部分では私はへえと思ったわけでございませし、また、重村公述人におかれましては、御経歴からして、ソウル

の特派員、そしてまたワシントンの特派員と、韓国、アメリカ、特に北朝鮮にとってみても非常に重要なこの二つの国で実際に住んで取材をされていたと。特に韓国においては、これは私の宣伝にもなるかもしれませんが、朝鮮日報という私の出身の新聞社と仲よしの新聞社の、今はもう特派員の事務所はお互いに持っているという中でいろいろな活動をされていたということで、非常に尊敬を申し上げているわけでございます。

まずお聞きしたいのは、今、この二〇〇二年の九月十七日の日朝平壤宣言、それと同時に、それに伴って、先ほど伊豆見公述人の方からお話がありましたように、北朝鮮ががらっと変わったと、日本に対してですね。今まで認めていなかったものを認め始めたということにおいては、本当に大きく転換をしたことは間違いないんじゃないかなというふうに思うんですけれども。

どうも、私もそのときの状況なんかを見ていると、確かに拉致の被害者は一部帰ってきたと。それと同時に、日本の一般の北朝鮮に対する認識というものもそれとまた比べてがらっと変わったというふうに思えるわけですが、じゃ、それで実際、本当にあのときのあの

時点であれば良かったんだろうかという検証もまた我々が考えていく
そろそろ時期になっているんじゃないのかなというふうに思います。

確かに私は、まあこれは野党の立場ですが、小泉総理の北朝鮮訪問
というのは一つの大きな転換点だったという部分においては、数少な
い小泉総理の功績の中の一つじゃないかなというふうに私は思うわけ
でございますが。

ただ、ミスターXと言われている人物が日本の外務省のどなたかと
いろいろとやり合っていたとか、実際あ那时候には拉致の被害者は日
本に帰っても一時帰国だという形を取っていたとか、何かその辺りで、
どうも我々の見えない、何かちょっと言い方は変ですけど、怪しいと
言っちゃ何ですけれども、それで実際に今、伊豆見公述人もおっしゃ
っていたように、北朝鮮はもうこれで拉致問題はおしまいだと、終わ
ったものだと、それで日朝国交正常化の交渉に入って、低迷する北朝
鮮経済に経済協力を中心としたそういう協力を受けることによって、
自分たちの体制の維持あるいは国内の引締めということも考えていき
たかったんじゃないかなというふうに私は思っているんですけれども、
その辺の検証、つまり政府はあれで、本当にあの対応でよかったのか、

と同時に、今もこの時点で政府の、日本政府の対応はよかったのかということをお二人にちょっとお答えいただきたいというふうに思います。

○公述人(伊豆見元君) 私は平壤宣言を評価する人間でございまして、それは、もうそろそろ九月で五年になりますが、五年になっても変わりません。しかし、その後の展開でいうならば、平壤宣言、あるいは第一回目の小泉訪朝で開いた道といたしますか、それをやはりそれどおりにといたしますか、いい方向に歩めなかったというふうに思います。

もちろん最大の問題は拉致問題であることも事実ではありますが、しかし、平壤宣言あるいは最初の小泉訪朝で大きかったことは、もちろん正常化をする意思があることを北朝鮮に明確に示し、北朝鮮もそれを確信したんだと思いますが、そのための条件として少なくとも、もちろん拉致問題の解決が必要であります。同時に、安全保障上の日本側の懸念というものが解消される、すなわち安全保障上の問題の解決が必要であるということが大きなテーマになっていたことが重要であった。

本来ですと、ですから日本は、私は、二〇〇二年十月以降も拉致問

題に加えて核問題、ミサイル問題というものを極めて重視し、同等に位置付け、北朝鮮との交渉に当たるべきであったと思いますが、しかし実際、十月の終わりに一回だけ日朝国交正常化交渉が開かれて以降の雰囲気であれば、明らかに拉致問題が第一、核問題、ミサイル問題、安全保障の問題は二の次、三の次ということになった。これは私は誠に残念なことであったと思います。

とりわけ、平壤宣言で私が忘れられませんのは、一番、平壤宣言の最後の一行は、日朝は別途に安全保障上の協議をすると、日朝間に安保協議を別途につくることは、これは北朝鮮が非常に逡巡していたものを日本側が最終的に説得して入れて入れたものがありますが、しかしこの単独の日朝安保協議というのは実は一回も開かれてないんです。昨年の二月の包括協議の中に安全保障が含まれましたけど、これでもそういう意味では単独のものではない。

実は、二〇〇二年の九月の平壤宣言で約束を取り付けた安全保障についての問題を協議し、解消、解決するための場というものを実は日本側は自らが使ってこなかったという点において、私は大変それを遺憾とするものであります。

○公述人（重村智計君） 平壤宣言の問題点は、もちろん小泉総理が北朝鮮に拉致を認めさせて五人を取り返したということは評価できるんですが、しかし平壤宣言の一番の問題は、拉致問題が主権侵害だと言わなかったことなんです。拉致は主権侵害ですからね。国際法上、主権侵害は原状回復が原則。原状回復は、拉致された人たちを元に戻すというのが原状回復で、これを交渉の場で言わなかったというのは一番の欠点で、これがないためにその後の拉致の交渉がうまくいっていない。これはやはり日本ははっきりすべきだということですね。

それから、平壤宣言のもう一つ、核の問題に関して言えば、核開発を放棄するということを入れさせなかったことですね。日朝国交正常化の後には北朝鮮は核開発を放棄すると入れさせなかった。それは入れない理由は何かといえば、北朝鮮は核の交渉はアメリカとやっているといるから入れられなかった、それがもう一つの問題ですね。

問題は、やはり白委員がおっしゃったように、ミスターXとの関係もあるんですが、ミスターXとの交渉について当時の外務省の高官は一切の記録を残してない。秘密交渉の記録を残さないというのは外交交渉ではあり得ない。一切の記録を残してないというんだから、これ

は非常にゆがんだ交渉と言うしかないんですね。どんなに公表できなくても外交記録は残さないといけない。いずれ何十年かして公表できるというのが原則なんです、これがないというのは、やはり日朝正常化交渉は異常であったと言わざるを得ない。

ですから、普通の外交というよりは、やっぱり北朝鮮に対する願いをやったのではないかと。外交とか駆け引きをきちんとやらなかったのではないかという不安が付きまとう。

それから、外交文書としては、我々新聞記者で外交交渉を取材するときには必ず合意したという言葉を探すんですが、日朝平壤宣言には合意したという言葉が基本的なところにはほとんどないんですね。だから、合意してない外交文書なんだと言わざるを得ないのと、それから北朝鮮側に拉致は解決したんだと言わせる三分の理というか、一分の理ぐらひは日本側が与えてしまった。それは何かというと、小泉総理は北朝鮮に行く前に、拉致被害者八件十二人の安否情報だけ教えてくれと言ったんです。八件十二人全員返せとは言わなかったんです。ですから、北朝鮮は五人生存、八人死亡という安否情報を教えただけで、それは北朝鮮に拉致問題は解決したと言い張る根拠を与えてしま

った。そこがまた問題であったと言わざるを得ないと。

○白眞勲君 正に私もその部分じゃないかなと思うんですね。結局、今こうやって日本がこの拉致問題においてなかなかその後の進展がうまくいってないというのは、北朝鮮側が拉致問題は解決済みだというふうに言っている根拠をもしかしたら日本側も、今、重村公述人がおっしゃったように、その日朝平壤宣言のあのときに話し合ったか、あるいはその前の今おっしゃったミスターXがどうこうということかもしれませんが、何かその間で何かがあったんじゃないのかというふうにも思わざるを得ない。それが結局、その後の今の状況にもつながってきているんじゃないんだろうかと。

それから、正に伊豆見公述人がおっしゃったように、拉致だけ、今、結局、日本の安全保障にとってみても、また拉致ももちろん重要ですがけれども、プラスやはり核、ミサイルの問題、この問題についてどうも日本側のスタンスがうまくいってないという部分においては、私も非常にこれはやはり日本外交にとってみて今後どうしていくかということがまたポイントになっていくんじゃないかなというふうに思うんですけれども。

そういう中で、そうは言ったって、ここまで来てしまった以上、何とかしてこの拉致問題も解決していかなくちゃいけないということがあるんですけども、端的にお聞きしたいんですけども、これ、拉致解決するためにどうしたらいいというふうに思いますか。

○公述人（伊豆見元君） 妙案がすぐ出せるということには私はならな
いだろうというふうに思いますが、ただ、まずは今、北朝鮮との交渉
ということも一方で行うことになりました。他方で圧力を掛け続ける、
制裁を続けているということは、これは北朝鮮の態度が変わらない限
りは解除するという話にならないと思いますので、それはそのまま継
続するのでありましようが、それに加えて、六か国協議の枠内での作
業部会ということで日朝の交渉も始まったということでもありますから、
一つは、その交渉を通じて、じゃ拉致問題をどういうふうに解決の方
に導いていくのかということだと思いますが、もちろん第一は、北朝
鮮の態度を二〇〇二年九月の段階に戻させることだと思います。

二〇〇二年九月の段階から二〇〇三年の、これいつ正確に変わった
かというのは明確な時期は申し上げられないんですが、失礼、二〇〇
三年じゃなくて二〇〇五年の春まで続いたですかね。北朝鮮は、拉致

問題は原則として解決したと、原則としてという、あるいはほとんど解決したという言い方だったのが、現在は御案内のようにすべて解決したと。したがって、すべて解決したと向こうが言っている限りはもう取り付く島もないわけでありまして、交渉を通じて解決に持っていくとする場合に、まず第一に我々が彼らの態度を変えさせなきゃいけないのは、もう一度二〇〇二年九月の線に戻させると。あの時点では彼らは完全に解決したとは言っていなかったわけでありまして、それが後になって完全に解決するというようなことがあり得るわけではないわけですから、もう一度原則としての解決、ほぼ解決と。ということは、まだ解決していない残された問題があり、したがってそこを詰めていくという、これが交渉の一つの突破口になると思いますので、まずそこは絶対にどうしてもやらなきゃいけないということだろうと。

それが前提になって、さて、じゃ交渉を通じてどういう形で拉致問題が解決していけるのかということが考えられるような話になるんだろうと思いますが、私は、これはかなり包括的に進めていくしかないであろうと。すなわち、拉致問題だけが突出しても、私は、北朝鮮が態度を変える可能性というのは非常に薄いと。なぜならば、拉致問

題を解決しても、核問題もミサイル問題も解決しなければ日本とは国交正常化ができない。国交正常化できなければ日本からの大規模な経済援助も得られない。北朝鮮にとって得になることは何もないと。得になることは何もないと考えると、私は北朝鮮は動かないのではないかと思いますので、だとすると、拉致問題の解決というのは、実は核あるいはミサイル、それと並行してといいますか、すべてをともかく包括的に、日本政府は元々包括的に解決すると言っているわけですから、ともかく包括的に問題の解決という方向で当たって、その中で拉致問題を解決を目指すというのが望ましいのではないかと考えております。

以上です。

○公述人（重村智計君） 唯一の方法は、金正日総書記と直談判するしかない。いかに下の人とやったって、こんなの上に伝わりませんからね。ですから、それは金正日総書記と直談判するか、あるいは金正日総書記に直接言える人と交渉するか、この二つしかない。さらには、金正日総書記に会う中国の指導者、ロシアの指導者にはっきり言ってもらう、あるいは交渉してもらう。そこが解決しないとだれも決断で

きないので。

金正日総書記は、二回にわたる小泉総理との会談の後で、もう三度目はだまされないと、こう言っているそうですからね。一度目は、国交正常化して経済協力資金もらえると行ったのにももらえなかった、二度目は、二十五万トンの食料をくれると言ったのに半分しかくれなかった。二回もだまされて、三度目はだまされないと、こう言っていると言われていきますからね。そこをしないとやはり進展はないんで、いろんな外交の表の面と裏の面がありますから、いろいろな水面下での交渉なり接触なりは可能でしょうから、そういう形を重ねながらやはり金正日総書記と直接意思を疎通してやる。

ただし、北朝鮮が欲しいのは正常化よりもお金ですから、日本から経済協力資金をどうやってもらえるかということですから、そこをどのようにクリアするか。核問題を解決しないと駄目なのか、核問題の解決の前にも出せるのか、その辺をクリアする協議は、アメリカとの協議をきちんとした上で、北朝鮮、特に北朝鮮の指導者と話し合っていくということがない限り、なかなか進展は難しいだろうと思うんですね。

○白眞勲君　そういう中で、一つ今正にアメリカと北朝鮮が、結局私は北朝鮮の二国間、アメリカとの二国間の交渉に入りたいという彼らの論理に今正に何か六か国という枠組みの中で乗ってしまっている、結果的にですけれども。残りの五つの作業部会のうちの四つが正に付け足しみたいな形になっている、そういう印象も私は与えられるのではないだろうかという中では、日朝作業部会がああいう形で、二日目はたしか四十五分だったと、交渉の時間ですね。四十五分といたって、結局通訳を入れれば半分の二十分でお互いに話していただけですから、二十分ということは、お互いに言いたいことを十分ずつ言っておしまいというだけの話だということになりますと、ただやったというだけの話になっているということだと私は思っているんですけれども。

そういう中で、いわゆるアメリカと北朝鮮との核をめぐるいろいろな動きが出てきていますが、正にお二人の公述人がおっしゃっているように、寧辺の五万トンについてはこれは何とかなるかもしれませんが、私は、その次のハードルというのは、極めてこれ大変なハードルになるのではないかなというふうに思っております。本当に

これが解決するだけの道筋がこの六か国の中での、米朝の中で本当にうまくいくのかなと、途中で何かぐじゃぐじゃになっちゃうんじゃないかと。結局、韓国、中国がそういう今進展しているんだからさと言って食料とか重油とかが、供給を受ける。それを北朝鮮はもくろんでいるんじゃないだろうか。正に今、重村公述人もおっしゃったように、核を全く放棄してしまったらだれにも相手されないところになっちゃうんじゃないかみたいな部分において、最終的には、私は国内の引締めと体制の維持という、金正日氏のその考えとは違った方向に向かう可能性を彼らは非常に警戒していると思うんですが、その辺はいかがでしょうか。伊豆見先生。

○公述人（伊豆見元君） どういうふうに申し上げられるのかってあれですが、北朝鮮がどう動いていくかということを考えるときの話になるかと思う……

○白眞勲君 九十五万トンの話。

○公述人（伊豆見元君） 九十五万トンの話がまずあれですか。そうですね、それは九十五万トンは次の段階措置と言われていまして、それが本当に実行されるのかどうかは分からないというのは、私も当然そ

うだろうと思います。

これは、六か国協議というよりも、もう本当に米朝関係がどのくらい進んでいくのかということに依じている話だと思ひまして、九十五万トンという、ものの部分を私は余り重視しない方がいいと。九十五万トンももちろんこれはそれ相当の、九十五万トンの例えば重油に相当する分の経済、エネルギー、人道支援という話になっていますから、大体九十五万トンの油が行くことはまず一〇〇%ありません。

そのうちアメリカがもし分担できるとすれば、その油は議会の承認が要りますんで、今議会は承認しませんから、行政府として出せるのは人道援助という形で食料援助なり医療援助を出すということになると。そうすると、そもそも九十五万トンの油が行くということはもう最初から全くないんですね。一番最大限に見積もっても七十五万トンとかそのくらいしか行かない。それは北朝鮮もよく分かっている話ですから、今これは大事なことは、北にとってもどれだけ物がもらえるかというのがインセンティブになっているという話ではないと。

それと、南北のコンテクストの話は、文脈で言いますと、別に六者とは関係はないわけではないですけども、韓国は出し続けたいとい

う意思があって、ほぼ韓国からの援助というのは制度化されていますし、これは来年、今度の大統領選挙の結果によっては随分変わってくるかもしれませんが、それは核問題が進展するか進展しないかとは余り関係なしにもらえる物があるというんで、これは北朝鮮の目から見れば全く別物だというふうに私は考えていると思いますし、同じことが中国に関しても言える話で、中国は、要は北朝鮮が安定してくれているということを最優先しているからこそ物を出しているわけで、これはそういう点でいいますと、核兵器をもし放棄すれば本当に極東の単なる極貧国なんですが、極貧国でそんなの相手にしないよというのは、日本やアメリカが相手にしないよというふうな話にはなる。とりわけアメリカはそうなるかもしれませんが。

しかし、中国、韓国というのは、私は姿勢はそれほど変わらないと思います。核を持とうが持つまいが、今の北朝鮮が崩壊してもらっては困る、不安定になってもらったら困るということであるならば、韓国が支える、中国が支えるというあれは全然変わらない。ですから、極貧国ではあっても、中韓という大変有り難いパトロンがくっ付いている、そういう存在であることは、核を持とうが持たないであろうが

変わらない。

だから、問題は、核を持っていると日本とアメリカとはいい関係には入らない。核を放棄しない限り、日本、アメリカとのまともな関係が持てないということだと思いますんで、それは北朝鮮が今後どう考えていくかという課題だろうと思います。

○公述人（重村智計君） 今、白委員おっしゃったように、米との交渉の行方はこれはもう不透明である。非常に難しいのはもうそのとおりですよ。取りあえずの核戦争の封印までは行くでしょうけれども、その後は、核査察になると北朝鮮はこれまで一切受け入れていませんので、核査察を受け入れなければ核問題の解決にはならないんですよ。

ですから、結局は相当時間の掛かる厳しい交渉になる。あるいは途中で挫折するかもしれない。ただ、アメリカは今、ブッシュ政権はこの任期の二年の間に、事態が進展した、外交的に交渉しているという状態が続けばいいわけで、その状態で持っていきたいと考えているわけですね。

あと、北朝鮮の今後の行方は韓国の大統領選挙に懸かっているわけ

でして、大統領選挙で与党が勝利すれば北朝鮮への支援は続くでしょうけど、野党がもし勝った場合には北朝鮮への支援は相当少なくなるのは間違いない。中国は、もう今支援している状況で目一杯ですから、年間五十万トンの石油あるいは五十万トンの食料というので、これ以上はもうただでやる気は全くありませんから。ですから、北朝鮮が期待している北朝鮮の経済の回復、あるいは体制の強化につながる支援はどこからも来ないというのが現状なんで、そうすれば、いずれ日本に結局は頼らざるを得ない。結局、大きな支援、お金を出せるのは日本しかありませんので、大きな流れの中では最終的には日本に頼らざるを得なくなってくるという展望を持っておくことが重要ではないかと思えますね。

[○白眞勲君](#) 時間もそろそろでございますが、最後に一言ずつお聞きしたいんですけども、六か国協議といっても、何となく日本の側から見るとロシアの位置付けというのがよく見えてこない。ロシアは一体どういうことを動いているんだろうかというのが見えていない。でも、私は、きっとロシアというのは何か何かやっているんじゃないかなというふうにも思えるんですけども、その辺についてのお二人のお考

えはいかがでございますでしょうか。

○公述人（伊豆見元君） ロシアは、要するにお金は出さないと、コストは分担したくないと、しかしプレゼンスは示したいというのが六か国協議の中におけるロシアの位置付けだと思います。

そうすると、今委員がいみじくも御指摘になられたように、よくロシアの存在が見えなくなるということであります。我が国が第二のロシアになるということになるのかもしれませんが。

○公述人（重村智計君） ロシアは、中国とは国際的な政策を分けていて、アジアについて発言権は残すけれども、アジアの基本的な政策は中国を尊重するという、その代わり、中東なりヨーロッパの政策については中国に協力してくれと、イランについてもロシアにやらせてくれと、こういうことで、作戦でやっている。

それと、ロシアとしては、金は一銭も出す気はありませんけれども、いずれ六か国協議が合意した場合にその利益はもらいたい。例えば、シベリア鉄道と南北の縦断鉄道をつなぐという、釜山からヨーロッパへのコンテナ輸送をすとか、あるいは北朝鮮へのエネルギー支援、石油支援のときには、石油は出すけれども金は日本に出してほしいと、

そういうもくろみがあるものでつながっているというのがロシアの状況だろうと思います。

○白眞勲君 本当に、お二人の公述人には本当にありがとうございます。時間になりましたので、これで終わらせていただきたいと思います。

ありがとうございました。